

じょうべのま遺跡発掘調査概報(8)

昭和60年3月

入善町教育委員会

発刊にあたって

昭和54年5月14日に国の史跡指定を受けた「じょうべのま遺跡」は昭和45年以来の発掘調査により、数々の貴重な資料を得、古代莊園遺跡として全国的にも高い評価を受けています。町では、この大切な遺跡を環境整備し、広く一般に開放し、文化財に対する理解を深めたいと考えております。

幸いにも、本年度より文化庁及び富山県の補助を受け、環境整備事業がスタートしその予備調査として発掘調査を実施いたしました。この調査に当り、ご多忙の身にもかかわらず献身的なご尽力を賜りました舟崎久雄先生をはじめ、貴重な助言をいただきました整備計画策定委員の方々発掘作業にご協力をいただきました皆様に対し深く感謝申し上げます。

昭和60年3月30日

富山県入善町教育委員会

教育長 森 栄

目 次

I.はじめに	1
II.調査の概要	2
III.遺物の概要	6
IV.まとめ	12
参考文献	12
写真図版	14

挿 図

第1図 位置図	1
第2図 トレンチ配置図	2
第3図 E-I、F-Iトレンチ実測図	3
第4図 D-E-II・E-IIIトレンチ実測図	4
第5図 F-IIトレンチ実測図	5
第6図 漆塗り椀出土状況	6
第7図 Hトレンチ実測図	6
第8図 E-IIトレンチ出土土器	8
第9図 E-IIトレンチ出土土器	9
第10図 E-IIトレンチ出土土器	10
第11図 F-IIトレンチ出土土器	11
第12図 河川跡復元図	13

例 言

1. 本書は、じょうべのま遺跡環境整備事業に伴う発掘調査の概報である。
2. 調査は入善町教育委員会が、昭和59年7月25日から9月8日まで実施した。
3. 調査及び本書の作成は、水橋高校教諭舟崎久雄がおこなった。なお田中久栄氏には、調査期間中、連絡所及び飲料水の提供をうけた。記して感謝する。調査参加者は以下のとおりである。水橋高校教諭舟崎久雄（調査担当者）、田中久栄、田中敬喜知、舟川のぶ、池原範子、田中九子、住久ヨシエ、田中キヨ、田中てる、島明子、若狭幸枝、川成はる、三島敏枝、宝田一枝、中瀬俱子、北尾真雅子、北尾久子、舟川かほる、大角ふみ子、柳平應一、田中正子、前沢聰夫、田中トシ子、鈴木たか子、鍋島ますゑ、田中三次、池原弘樹（以上、地元作業員）
4. 調査事務局は入善町教育委員会におき、庶務は課員の協力を得て社会教育課主任鍋谷良和が担当し、社会教育課長永原広由が総括した。
5. 調査と概報作成にあたって、建物復元については奈良国立文化財研究所宮本長二郎氏、地質については水橋高校教諭富山正治氏、全般にわたってはじょうべのま遺跡整備計画策定委員の各氏から指導、助言をいただいた。委員は下記のとおりである。
狩野久、田中哲雄、北村文治、濱畠、前田英雄、松島吉信、奥田淳爾、石井正雄、西尾三郎、田中久栄、森栄、舟崎久雄

I. はじめに

じょうべのま遺跡は、富山県入善町田中の海岸に接して、位置する。国鉄北陸本線入善駅の北方1.5kmにあたる。かっては100m以上の砂浜が伸びており、昭和46年の発掘調査のころも、砂浜はまだ10mはあったが、寄り回り波の影響等で海岸浸食がすすみ、現在では全く姿を消してしまい、防波堤を越えた飛沫が遺跡地の一部におよぶまでに至っている。

遺跡の発見がいつころかは明確でないが、昭和16年に「紀元二千六百年」を記念した郷土史の発刊が企画された際には、遺跡のあることが確認されている。その後も農作業の際に、土器の出土することは知られていたが、発掘調査はおこなわれないままであった。しかし昭和45年に至り、遺跡地一帯には場整備事業がおこなわれることになり、発掘調査がおこなわれた。そして県下で初めて明瞭な掘立柱建物が確認され、遺跡の中心部分は、関係機関の努力により、工事計画が変更され、保存されることになったのである。翌年からは、保存部分の精査および周囲への括りの確認調査がおこなわれ、さらには海岸浸食にそなえての副堤の建設にともなう調査などがおこなわれた。それらは昭和58年まで、試掘調査も含めて、十数回におよんでいる（《参考文献》を参照）。

この間に、これらの調査の成果にもとづいて、じょうべのま遺跡は昭和54年に国の史跡に指定された。それ以後、入善町では遺跡の整備について検討していたが、昭和57年11月に「じょうべのま遺跡整備計画策定委員会」が発足し、整備計画の具体化に着手した。そして翌年夏には、整備基本計画を策定するための試掘調査をおこなった。その目的は、C地区で確認され、指定地の中央部を貫流すると考えられる、幅30m以上の河川跡（文献6）の追跡、E地区で推定された入江状の落ち込み（文献2）の確認等にあった。その結果、河川跡は蛇行しながら指定地中央部を貫流することが確認された。しかし後者については、その性格が今一步不明瞭であり、また河川跡との関係も判然としなかった。またE・F地区にかけて確認された柱穴についても、建物群として把握せねばならない等の課題が残された（文献8）。

今年度の調査は、昨年度のそれをふまえ、入江状の落ち込みと河川跡との関係、E・F地区の建物群の把握を主要な目的としておこなった。調査は、7月23・24日に発掘準備をおこない、同月25日のF-IIトレンチの発掘から、開始された。その後、順次、E-II、D、E-III、E-I・F-Iトレンチを調査し、8月11日のHトレンチの調査で発掘作業を終えた。その後、実測等をおこない、9月8日に埋戻しを完了し、調査は終了した。



第1図 位置図

II、調査の概要

調査の目的を達成するため、5つの地点に7本のトレーニングを設定した。(第2図)。

E-I・F-Iトレーニングは、18m×18mのトレーニングであり、建物群の確認のために設定した。

Dトレーニングは、13m×3mで、昨年度の調査で確認された、礫層中の2条の溝の性格を調べる目的である。

E-IIトレーニングは、20m×6mで、入江状の落ち込みの性格および河川跡との関係を確認するために設定した。しかしこのトレーニングで河川跡との関係を把握できなかったので、E-IIIトレーニングを設定した。

E-IIIトレーニングは、15m×3mで、上記および河川跡西岸の確認を目的とした。

F-IIトレーニングは、36m×3mで、そのうち西6m分はA地区にかかる。河川跡の東西両岸および河底面を確認する目的であった。

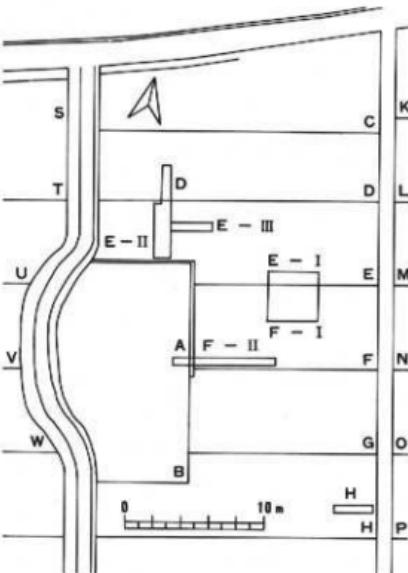
Hトレーニングは、18m×3mで、この部分に管理施設の建設が計画されているため、遺構の有無を確認することを目的として設定した。

これら各トレーニングの調査結果について、その概要を以下に述べる。

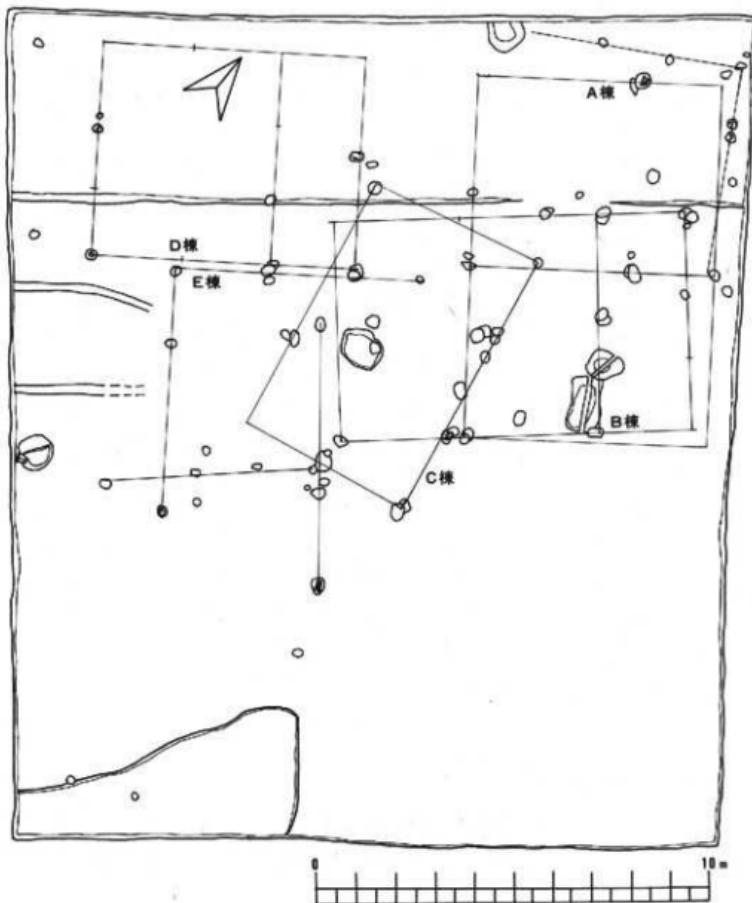
E-I・F-Iトレーニング(第3図) この地区は、昭和46年の調査においてすでに柱穴等の確認されているところである(文献2)。今回の調査でも、多数の柱穴と2条の溝を検出した。この地区は表土直下が地山となる。地山は、西側 $\frac{1}{2}$ は砂地であり、他は茶褐色の砂質土である。東南部分約 $\frac{1}{2}$ は、図では遺構が存在しないかのようであるが、ここはは場整備工事の際に深く搅乱され大きなコンクリート片等が投棄されていたところである。

この地区は、は場整備工事にあたって約20cm切土されており、そのためか、柱穴の遺存状況はよくなかった。柱穴はいずれも、10cm程で地山に達する。柱根の残る2個の柱穴も、柱根の底部がほとんど露出していた。消滅した柱穴も多いものと推定される。また、柱根を引抜いた跡に投げこまれたかのように、柱穴上に石があったり、石のみが残ったりする。柱穴の大きさは、現状で、径30cm前後のものと、15~20cm前後のやや小さなものとがある。

このような状況であるため、建物として柱穴をまとめることは困難であったが、5棟以上の建物が想定される。それらのうち、1棟としてまとめうるもの、仮にA~E棟とする。A棟は南



第2図 トレーニング配置図



第3図 E-I、F-I トレンチ実測図

東一北西方方向の棟をもち、推定 $9.7\text{ m} \times 6.3\text{ m}$ の規模となる。B棟は、北東一南西の棟方向であり、 $8.8\text{ m} \times 5.6\text{ m}$ 、C棟は南北棟で、 $7\text{ m} \times 4.5\text{ m}$ 、D棟は北東一南西の棟方向で、 $6.8\text{ m} \times 5.4\text{ m}$ 、E棟も北東一南西の棟方向で、 $6.3\text{ m} \times 5.7\text{ m}$ の規模、とそれぞれ推定されている。

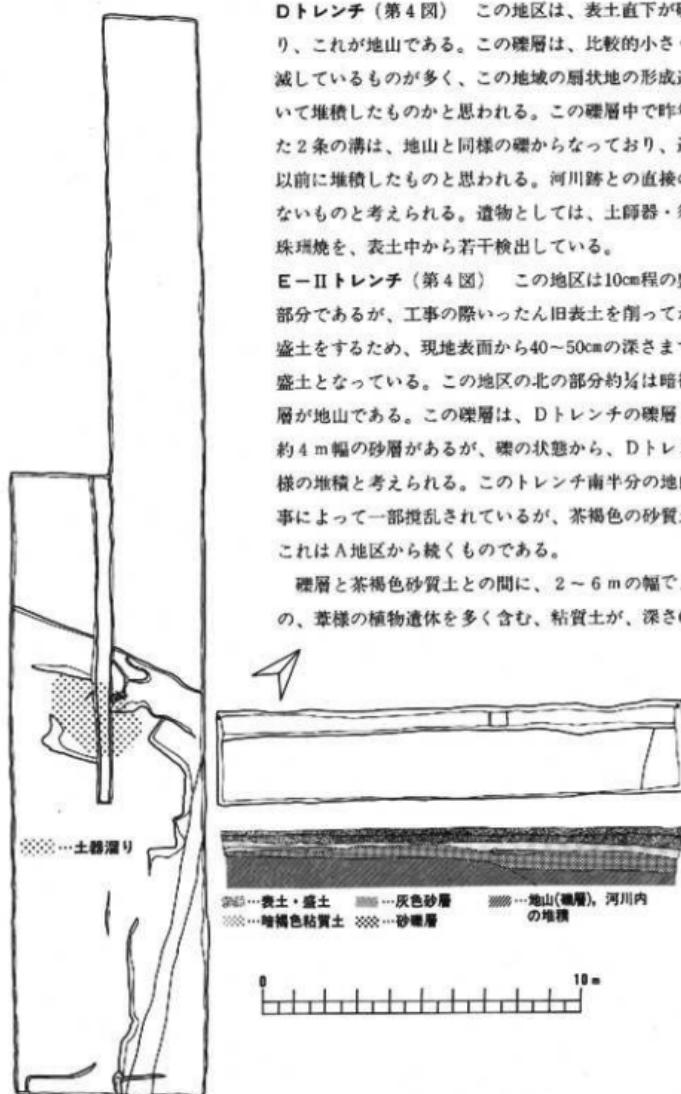
建物の時期としては、平安時代前期のA地区の建物とは方位的にややずれるが、柱穴の大きさからみた場合、中世の建物群が検出されたL地区の柱穴と比較した時、よりA地区の柱穴に近いと

考えられる。

D トレンチ (第4図) この地区は、表土直下が礫層であり、これが地山である。この礫層は、比較的小さくて、磨滅しているものが多く、この地域の扇状地の形成過程において堆積したものかと思われる。この礫層中で昨年検出した2条の溝は、地山と同様の礫からなっており、遺跡成立以前に堆積したものと思われる。河川跡との直接の関係はないものと考えられる。遺物としては、土師器・須恵器・珠環焼を、表土中から若干検出している。

E-II トレンチ (第4図) この地区は10cm程の盛土工事部分であるが、工事の際いったん旧表土を削ってから再度盛土をするため、現地表面から40~50cmの深さまで、その盛土となっている。この地区の北の部分約 $\frac{1}{2}$ は暗褐色の礫層が地山である。この礫層は、Dトレンチの礫層との間に約4m幅の砂層があるが、礫の状態から、Dトレンチと同様の堆積と考えられる。このトレンチ南半分の地山は、工事によって一部搅乱されているが、茶褐色の砂質土である。これはA地区から続くものである。

礫層と茶褐色砂質土との間に、2~6mの幅で、黒褐色の、草様の植物遺体を多く含む、粘質土が、深さ60cm前後



第4図 D・E-II・E-III トレンチ実測図

で帶状に東西にひろがる。このトレンチ中央に設定した土層観察用畦畔の北端部分から8mにわたって、盛土層直下から、厚さ10cm前後の砂層があった。これは昭和46年秋の調査の試掘トレンチの跡であり、砂層の南端は、黒褐色粘質土のひろがるやや南でおわる。このことから、黒褐色粘質土のひろがる部分は、昭和46年の調査において沼地と考えられた地点（文献2）と判断される。この沼地は、規模のやや大きいものと想定されていたのであるが、今回の調査により、上述のような規模と判明した。この沼地は、西方へはまだ延長されると思われるが、東側は、E-Iトレンチにおいて述べるが、沢がひろがっており、ここで途切れるであろう。

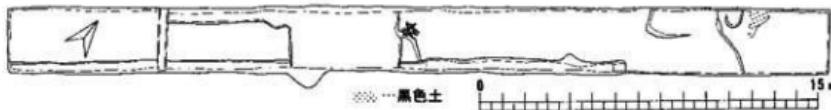
トレンチ南端から北方へ延びる、幅約60cmの、黒色土の埋まる溝を検出した。北端はE-Iトレンチ西端へつながるかのようであるが、E-Iトレンチの状況から、ここで途切れるものと思われる。

遺物としては、珠珊瑚若干の他は、七輪器、須恵器である。特に後二者は、黒褐色土中から相当量出土したが、図中の網点部分に集中した。ヒスイ原石1点も出土している。

E-Iトレンチ（第4図） この地区は20~40cmの盛土工事の部分である。そのため、現地表面から30~70cmの深さで、西から東へ深くなりながら盛土されている。盛土層の下は、礫を多く含む暗褐色粘質土で、木根が目立つ。この層は、トレンチ東端1.5m付近で、東へ向って落ち込んでいく。は場整備前の地図によれば、この部分は南方の沢から流れ出る小河川となっており、落ち込みはこれにあたる。またその西方は水田となっているが、木根を含む混疊暗褐色土から、水田化以前には沢のひろがっていたことがわかる。附言すれば、この土層上部から大正年間発行の五十銭銀貨、十銭銅貨が出土しており、沢が水田化されたのはそれ以降であると思われる。

混疊暗褐色土の下には、断続する薄い灰色砂層をはさんで、灰色の砂を混じえる礫層になる。この礫層は、トレンチ西端から8m付近で、東へ向って落ち込んでいく。そして、最下部までは未掘であるが、砂層と礫層の互層となる状況が観察された。またトレンチ東端近くの、深さ1.2mの地点から、須恵器壺胴部の破片を検出している。これらからこの落ち込みは、河川跡の西岸部分と判断される。

F-IIトレンチ（第5図） このトレンチは、は場整備前には、中央部付近は沢から流れ出る河川であり、東端付近は80cm程高く、水田となっていた。そのため、水田部分は20cmの切土工事、河川部分は50cmの盛土工事となっている。それにより、東端付近は、表土直下が明褐色砂質土の地山であり、中央部は1m以上の盛土となっている。このトレンチにおいても、東端から約5mの地点から、盛土直下に、木根を多く含む混疊暗褐色粘質土が、中央へ向けて下向しながら厚く堆積して行き、19m付近で一端途切れ、26m付近からこんどは厚さを減していく。途切れた部分



第5図 F-IIトレンチ実測図

は沢の中の河川であり、暗褐色粘質土は沢地帯であったと考えられる。

沢の堆積土について、灰色砂層が堆積する。この砂層は東から西へかけて次第に厚くなる。A地区に入った部分では、湧水のため最下部まで確認できなかったが、現状で40cm以上の厚さとなる。砂層について、礫層が堆積する。この礫層は灰色を呈し、中央部へ向って下向していくが、ここでも湧水があって、その状況を十分に確認するにはいたらなかった。この礫層は、トレンチ東端から9m付近で、灰色から褐色へ変化しており、ここが河川跡の東岸になると考えられる。

東端部分で検出した明褐色砂質上の地山は、8m付近で褐色礫層へと変り、この礫層も14m付近で沢の中へ没する。明褐色砂質土の上には、黒褐色土が堆積する部分がある。この層は、この遺跡の包含層にあたる。この層の上部から漆塗りの木製の柄を検出した（第6図）。明褐色砂質土中に、径約1mの土壇状にひろがる黒色土があり、土師器や炭化物が集中していたが、土壇の最下底部のみが残存していたものか、明確な遺構とはならなかった。

遺物としては、上述の他に、沢の堆積土中から、珠環焼・土師器・須恵器・漆塗り木製椀等が出土しており、灰色砂層中からは、土師器・須恵器・綠釉陶器を検出している。

Hトレンチ（第7図） H地区は、中央部に沢が発達しており、その他は水田となっていた。しかし発掘の結果、地山が確認できたのはトレンチ東端部分だけであり、他はすべて沢の堆積土であった。その堆積は、現地表面から1m以上になるものと思われる。遺物は、表土および沢の堆積土中から、土師器・須恵器・珠環焼・白磁等を若干検出している。



第6図 漆塗り椀出土状況



第7図 Hトレンチ実測図

III、遺物の概要

遺物には、土師器・須恵器・綠釉陶器・珠環焼・青磁・白磁等の土器、土錐、木製の漆塗り椀ヒスイ原石等がある。これらは、各トレンチの各層位から出土している。ここには、E-IIトレンチ出土遺物を中心にして、その概要を述べる。

E-I・F-Iトレンチ 表土および擾乱土から、土師器・須恵器を中心にして、珠環焼・青磁が出土している。小片が多い。土師器には、杯・甕がある。須恵器も杯・甕がほとんどである。

珠環焼は、中型の壺又は甕・すり鉢がある。青磁（図版9 下段右下）は、楕の口縁部小片である。外面にやや幅広で、先端部の丸い蓮弁を、浮き彫り風に施文する。オリーブ色を呈する。

二ヶ所の柱穴には、柱根が遺存していた（図版9下段）。右側の柱根は、長さ31cm、径13cm、左側の柱根は、長さ34cm、径19cmを計る。底部にははつりの痕跡を残し、側面にも幅2~4cmで加工した痕がうかがわれる。

Dトレンチ 表土中から、土師器杯・甕、須恵器甕、珠環焼甕又は壺の小片が、若干出土しているのみである。

E-IIトレンチ（第8・9・10図） このトレンチからは、大量の土器を中心とした遺物が出土した。それらは、表土中からも若干の出土をみたが、大部分はトレンチ中央部の黒褐色土のうちの網点部分（第4図）から出土した。ただこの黒褐色土の上部にはビニール片を含んでおり、また上器には押圧された状況で出土するものもあり、は場整備工事の影響を受けたと考えられるが大きな擾乱を受けたとはみられなかった。

遺物には、土師器・須恵器・黒色土器・ヒスイ原石がある。

土師器 杯・碗・甕がある。土器全体に占める割合は低い。

杯（1~3）は、口径17.6cm~22.3cmを計る。いずれも大型で、やや内済気味にたちあがり、口縁端部は外へひらくようにして丸くおさめる。体部外面はヨコナデ、内面はヘラ磨きで調整する。底部は平底で、回転糸切り痕をとどめる。墨書断片の残るものがある（図版9右下）。

碗（5・6）は、口径11.2cm~15.6cmである。杯に比べてやや厚味がある。内済してたちあがる体部と丸くおわる口縁端部をもつ。体部外面はヨコナデ調整をおこない、内面にはヘラ磨きを施したものがある。

甕口縁部は、小片ばかりであるが、従来から知られる各種の形態がある。体部には平行タタキ痕をとどめる。

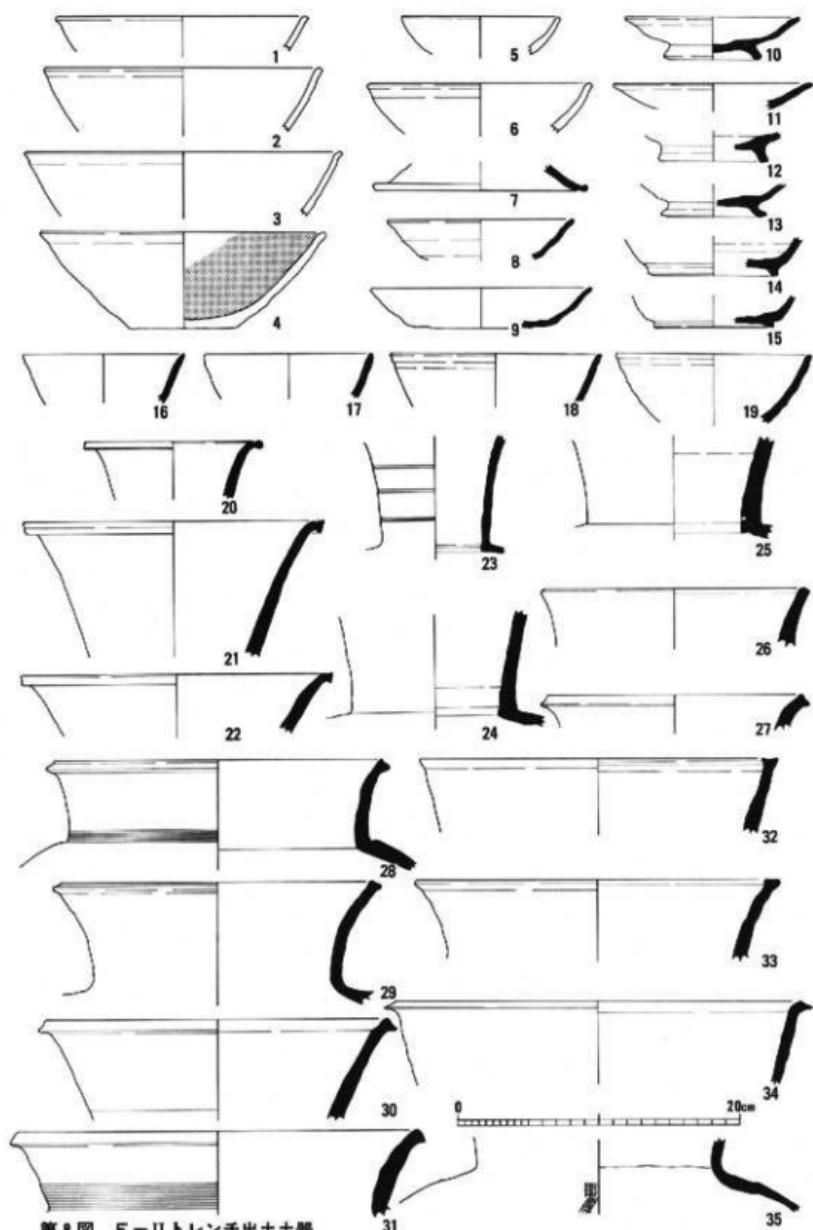
須恵器 杯蓋・杯A・杯B・皿・壺・双耳瓶・鉄鉢型・甕がある。

杯蓋（7）は口径14.9cmを計る。屈曲して丸くおわる口縁端部をもつ。内外面ともにヨコナデ調整をおこなう。灰色を呈する。

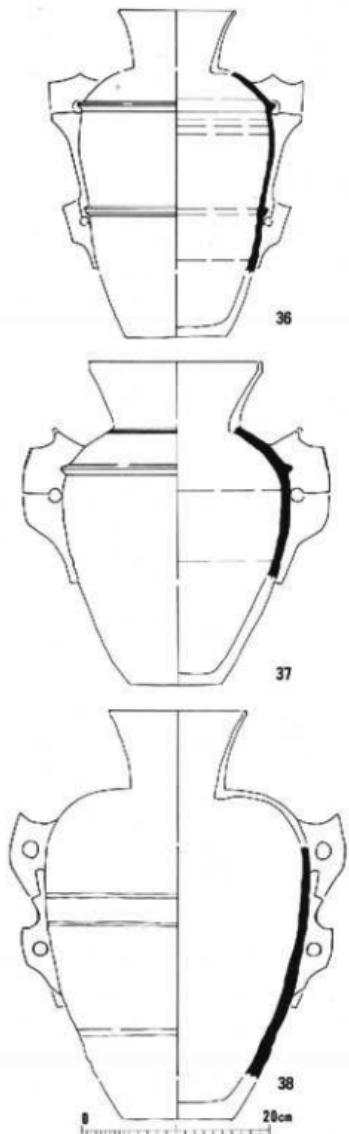
杯A（8~9）は高台を有しない一群をさす。口径13.4cm~15.6cm、器高2.8cmを計る。外方へ直線的にひろがる体部をもつ。内外面ともにヨコナデ調整であり、底部にはヘラ切り痕をとどめる。灰色を呈する。

杯B（14~19）は高台を有する一群である。口径10.7cm~14.7cmを計る。器高を推定しても、大小二種ある。体部は直線的に外方へひろがる。底部には、やや外方へふんばる高台を付ける。底部外面にはヘラ切り痕をとどめ、他はヨコナデ調整である。灰色を呈するものが多い。

皿（10~13）は、口径12.4cm~13.4cm、底径6.1cm~6.8cm、器高3.0cmを計る。10のように底部から屈曲してたちあがり、口縁端部で外展する類と、11のように底部から直線的にひらく、浅い器形がある。高台は外方へふんばる、しっかりしたものが多い。底部外面中央部以外はヨコナデ調整をおこなう。底部切り離しははっきりしない。色調は灰色のものもあるが、赤褐色を



第8図 E-II トレンチ出土土器

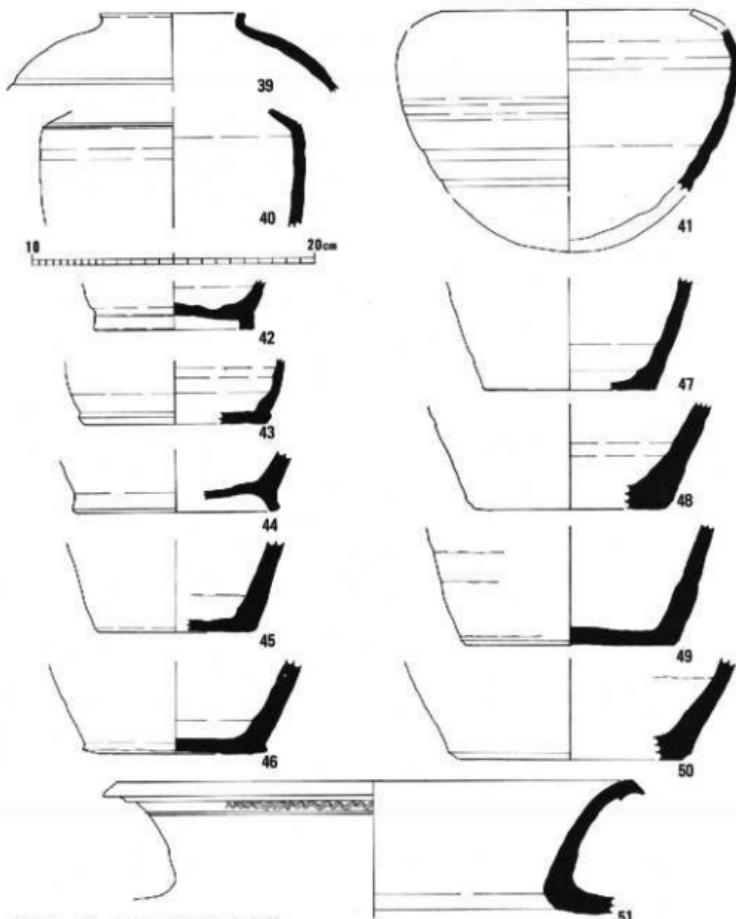


第9図 E-IIトレンチ出土土器

呈するものが多く、いわゆる赤焼き土器のような感じである。胎土は砂粒が多い。

壺 20・23は、長頸壺の口縁部と頸部である。20は口径12.5cmを計る。内外面ともにヨコナデ調整をおこなう。外面は灰色、内面は暗灰色を呈し、薄く自然釉がかかる。23は、三段にわたってヘラ描きの沈線を施すが、最下段は浅い二条の沈線になる。外面は灰白色の灰が付着しており、調整は不明である。内面は灰褐色で、ヨコナデ調整をおこなう。39は短い口縁部をもつ、口径10.3cmである。胴上半に浅い凹線がめぐる。内外面ともにヨコナデで調整する。外面には青灰色の灰が付着し、内面は淡い灰黒色を呈する。焼成は堅緻である。40も広口の短頸壺である。胴部最大径は17.8cmである。肩部と胴部の境に段をめぐらす。内外とともにヨコナデ調整である。灰色を呈する。胴部と底部との接合痕を内外面に残す。

双耳瓶 約10個体分出土している。21・22は双耳瓶の口縁部であろう。口径は、21が20.6cm、22が21.9cmである。いずれも内外面ヨコナデである。21は外面は灰黒色を呈し、一部に緑色自然釉、灰がかかる。内面は一面に灰が付着する。22は内外面ともに緑色自然釉がかかる。36～38は胴部であるが、突帯を有するものと有しないもの、耳も一段と二段のものがある。36はやや小型で薄手の造りである。二条の突帯と二段の耳をもつ。胴部最大径は20.9cmである。内外面ともにヨコナデ調整をおこなう。外面上半は灰色を、下半は黒色を呈する。中央部には灰が付着する。内面は灰色である。37は一条の突帯と一段の大ぶりの耳をもつ。胴部最大径は24.3cmである。厚手でずんぐりした造作である。頭部との接合部近くにカキ目を施す他は、内外面ともにヨコナデ調整である。外面は一部に灰白色の灰が付着し、薄く自然釉がかかる。暗灰色を呈する。内面も暗灰色である。38は突帯を有さず、二段の耳をもつ。外面に残る二条の沈線様の凹みは、粘土紐接合の痕跡であろうか。胴部最大径28.2cm。内外面ともに



第10図 E-II トレンチ出土土器

ヨコナデ調整である。耳を中心とした部分には緑色自然釉がかかる。灰白色の灰も付着する。内外面ともに暗灰色を呈する。胴部下半には気泡がある。45~50はいずれも双耳瓶の底部であろう。

鉄鉢型土器(41)は、最大径24.3cmを計る。内外面ともにヨコナデ調整をおこない、灰黒色を呈する。堅緻な焼成である。

甌 中型の26~35と、大型の51がある。中型のものは、口縁部の形態によって26、27~31、32・33、34の四類に分けられる。26は18.3cm、27~31は17.9cm~28.4cm 32は25.4cm、34は25.7cm、35は28.6cmである。28・31が頸部下半にカキ目を施す他は、いずれもヨコナデ調整である。色調

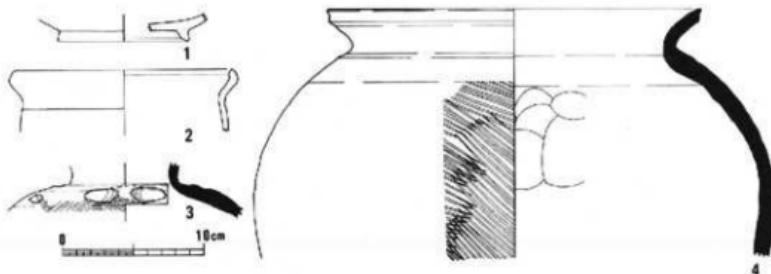
は灰色が多いが、33のように黒色を呈するものもある。大型の51は、口径36.6cmを計る。口縁部直下に一条の突帯と沈線をめぐらし、その間に二条の波状文を施文する。口頸部はヨコナデ調整をおこなう。暗灰色を呈する。胴部には内外面ともにタタキ痕がある。外面のタタキは、平行タタキ目が主であるが、格子状のものもある。内面のタタキは、通有の青海波のものが多いが、格子状タタキ目・平行タタキ目のものもある。

黒色土器杯は数点出土しているが、いずれも大型になる(4)。黒色化は、口縁部外面の一部にもおよぶが、内面は%程度黒色化しているだけである。外面はヨコナデ調整、内面はヘラ磨きをおこなう。外面の色調は明褐色である。4は、口径20.1cm、器高6.8cmを計る。

ヒスイ原石は、不定形であるが、最大の部分で、9cmの幅と6cmの厚さをもつ。

風字硯(図版7中右上)は、同一個体とみなされるものが、昭和46年度の調査において、A地区から出土している(文献2)。

E-III トレンチ このトレンチからは、土師器杯・甕、須恵器杯・壺・甕、珠環焼甕、越中瀬戸焼と思われる皿が出土しており、その他に、漆塗りの木製椀(図版9上段)を1点、大正年間発行の五十銭銀貨・十銭銅貨を検出した。土器はいずれも小片であり、量的にも少ない。土器のうち、後二者は暗褐色の沢の堆積土から出土している。河川跡内からは、須恵器壺の口縁部片2点と甕胴部を検出している。漆塗り椀は、口径11.5cm、高台の径6cm、高さ4.5cmを計る。沢の堆積土から出土している。貨幣も同様である。



第11図 F-II トレンチ出土土器

F-II トレンチ(第11図) このトレンチからは、土師器の高台付皿・杯・甕、須恵器杯・甕、黒色土器杯、縁釉陶器、珠環焼壺・甕が出土しており、漆塗りの木製椀も2点出土している。

土師器高台付皿(1)は、外面にヨコナデ調整をおこなう。内面の調整は不明である。色調は、内面は淡褐色、外面は赤褐色を呈する。甕(2)は口径15.2cmを計る。頸部と胴部の境界に浅い段を有する。調整は、一部にヨコナデ・カキ目がおこなわれる他は、不明である。これらは、トレンチ東端の炭化物を伴う黒褐色土から出土した。図示したものの他に、灰色砂層から杯・甕の小片が出土している。

須恵器は、杯Aの底部が、1・2と共に伴っている。また灰色砂層中から、杯の口縁部・杯Aの底部・壺口縁部・甕が出土している。

黒色土器は、黒褐色土および砂層から、杯体部片が出土している。いずれも大型の杯と思われる。

綠釉陶器（図版9下段右上）は、トレンチ中央部の灰色砂層から出土した。杯の体部下半であろう。内外面ともに淡い黄緑色を呈する。細密な胎土であるが、砂礫を若干含む。

珠瑠焼は、沢の堆積土中から出土した。3は小型の壺で、肩部の四ヶ所にブリッジ状の把手のつく四耳壺である。耳をとりつける前に、6条の波状文を描き、その後さらにヨコナテを上端部におこなう。暗赤褐色を呈し、堅敏な焼成である。4は中型の壺である。口径26.5cmを計る。口頭部は強く外反し、最大径は胴上部にあり、37.1cmを計る。褐色ないしは灰褐色を呈する。

漆塗り椀のうち、1点は沢の堆積土中から出土した（図版9上段右）。現存部で、口径11.5cm、底径5.5cm、器高4cmを計る。高台は欠失している。他の1点は、黒褐色土の上部から出土した（第6図）。漆被膜のみが残存していた。

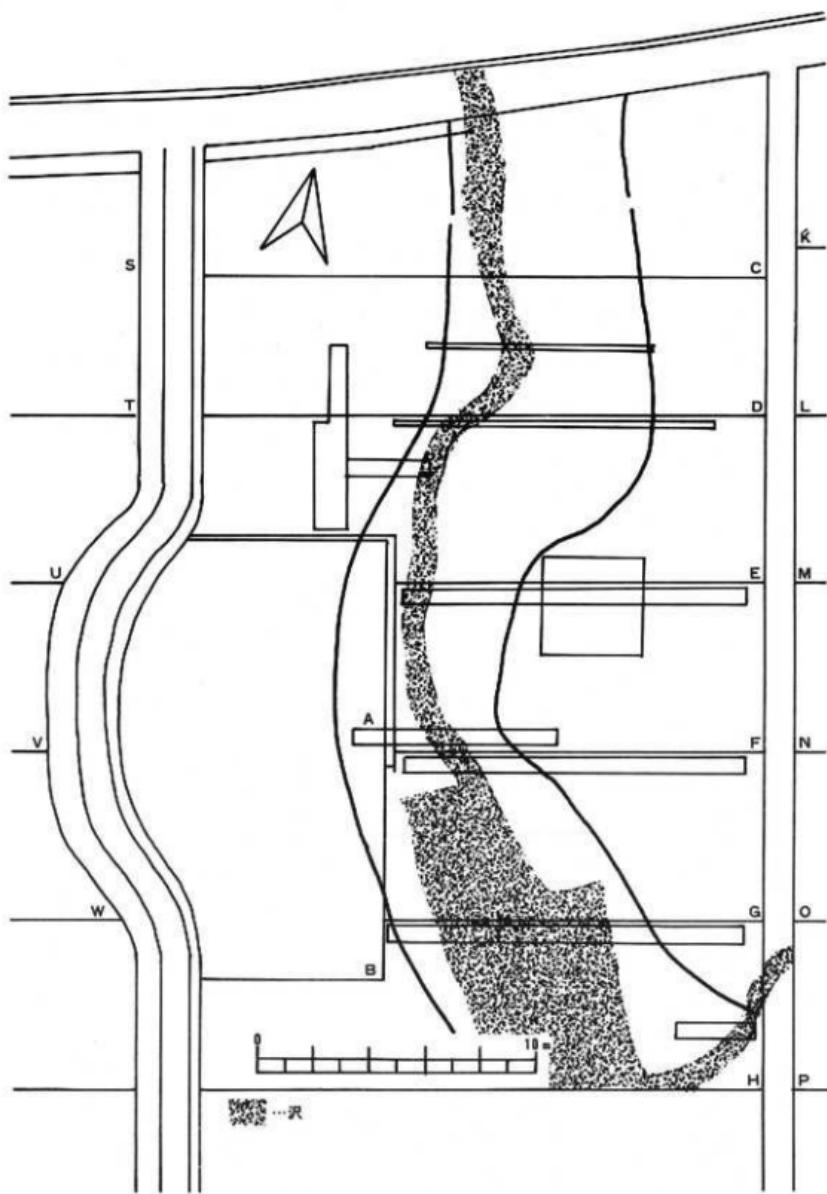
Hトレンチ 土器類、須恵器杯B、珠瑠焼、白磁、土鍤が出土している。いずれも表土および沢の堆積土中からの出土であり、小片で、量的にも少ない。

IV. まとめ

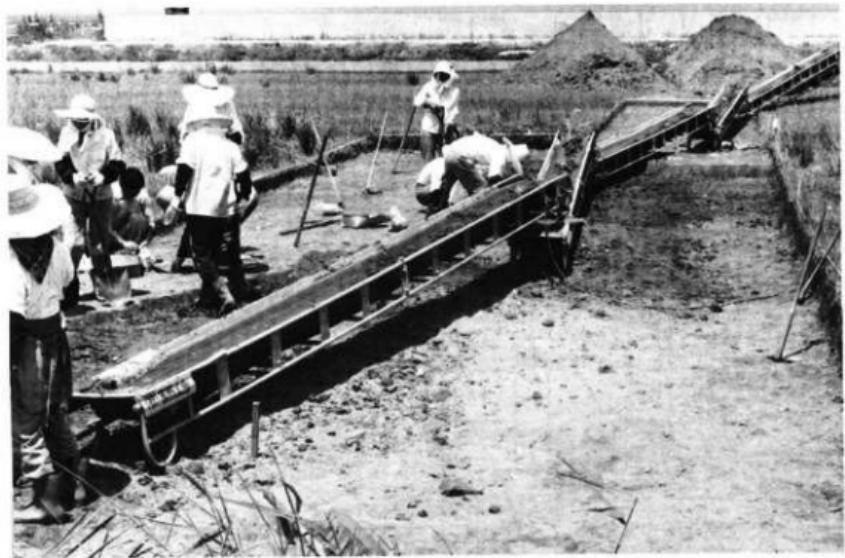
1. 幅30mの河川跡は、昨年度の想定と大きな違いではなく、指定地中央を貫流する。
2. E-IIトレンチで相当の規模を有すると推定されていた沼状の落ち込みの範囲は、かなり限定了された。河川跡との直接の関係は薄いものと思われる。
3. E-I・F-Iトレンチで想定された建物群は、C地区・L地区で出土する建物群と比較する時、よりA地区のそれに近い。
4. Hトレンチ一帯は、ほとんどが沢であったことが確認できた。発掘した範囲は河川跡の中に含まれるが、造構面に達するまで1m以上の掘削を要する。
5. E-IIトレンチ出土の土器群は、文献4の時期区分に従えば、D・E期に相当するものが主体となる。またA地区出土の風字硯と同一個体とみなされる小片が出土しており、注意される。詳細は、今後の検討が必要である。

参考文献

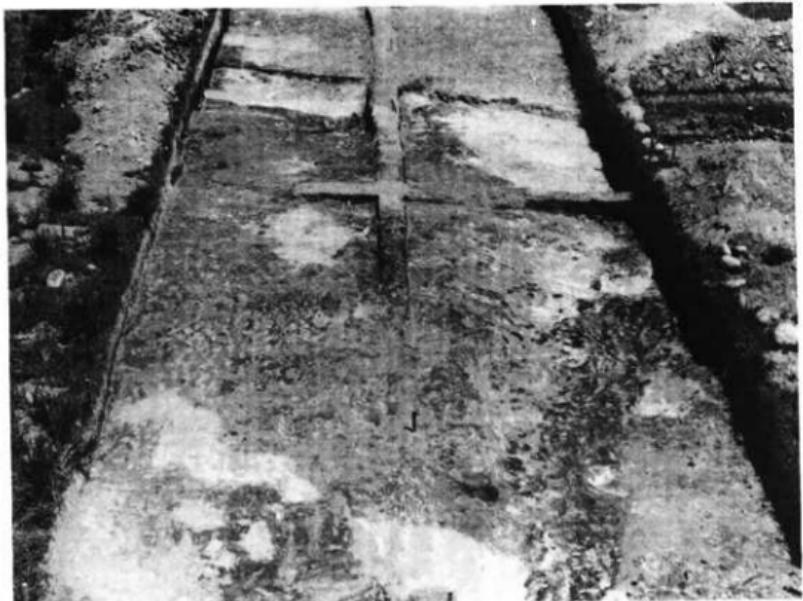
- ①『じょうべのま』 竹内俊一 1971 入善町教育委員会
- ②『入善町じょうべのま遺跡発掘調査概報』高島忠平他 1972 富山県教育委員会
- ③『同上』(2) 高島忠平他 1973 同上 入善町教育委員会
- ④『同上』(3) 橋本正他 1975 入善町教育委員会
- ⑤『入善町じょうべのま遺跡予備調査概要』(4) 神保孝造他 1981 同上
- ⑥『入善町じょうべのま遺跡発掘調査概報』(5) 山本正敏他 1982 同上
- ⑦『入善町じょうべのま遺跡予備調査概要』(6) 松島吉信 1983 同上
- ⑧『入善町じょうべのま遺跡発掘調査概要』 舟崎久雄 1983 同上



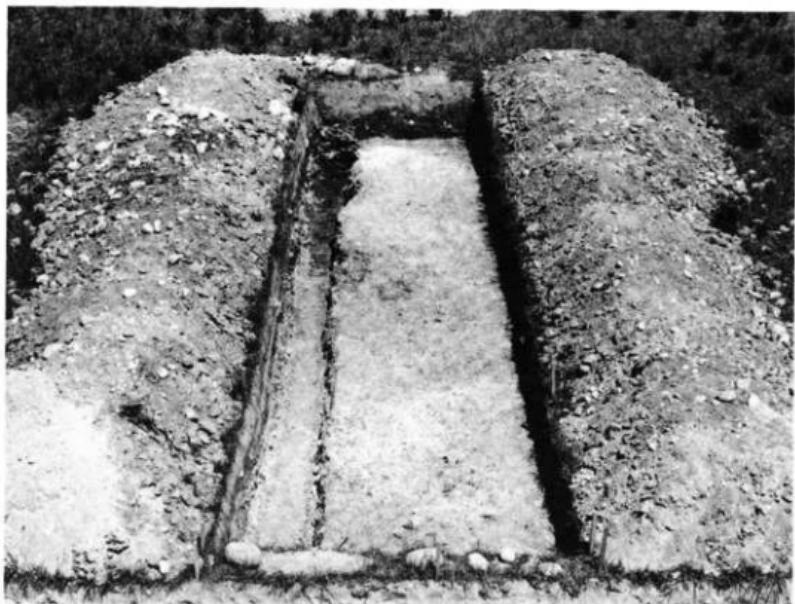
第12図 河川跡復元図



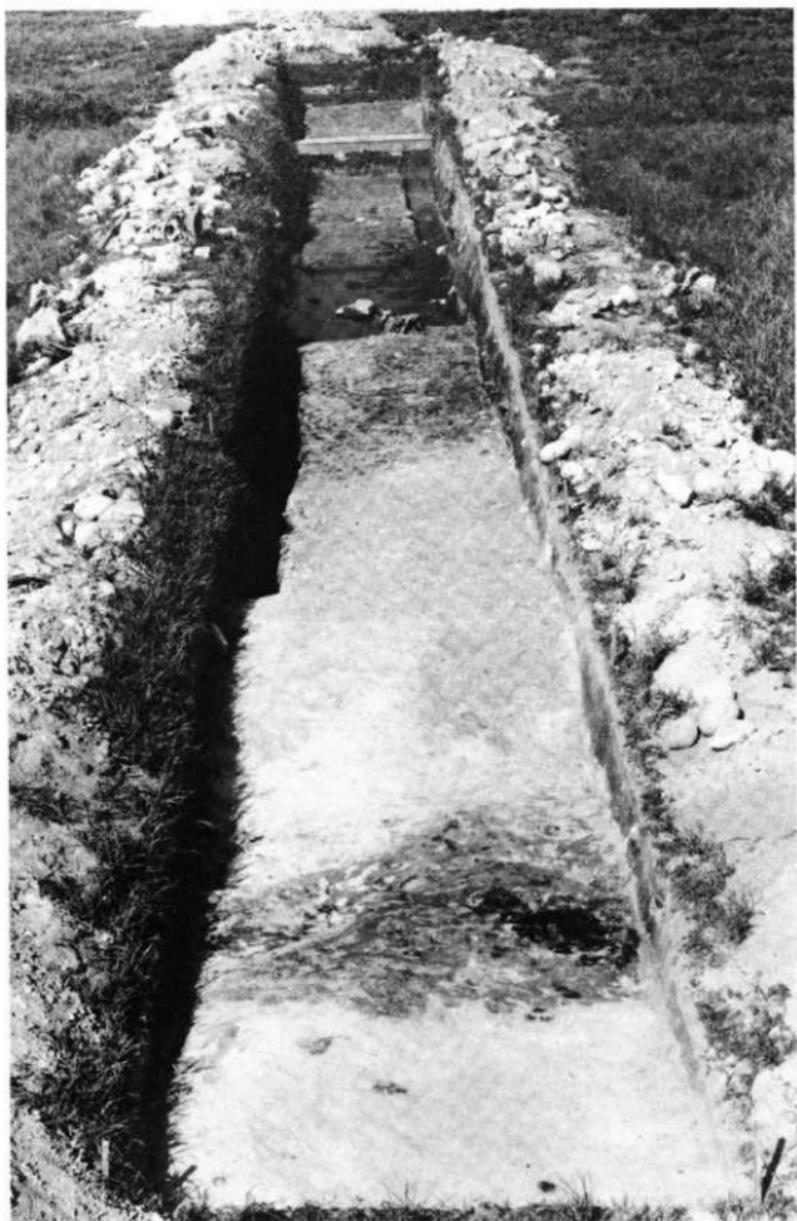
図版1 上：発掘風景 下：E—I、F—Iトレンチ（北から）



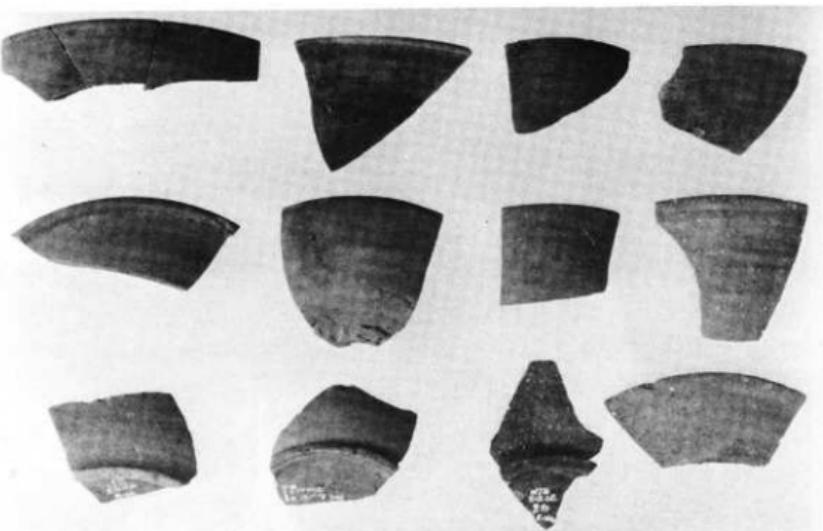
図版2 上:Dトレンチ(北から) 下:E-IIトレンチ(南から)



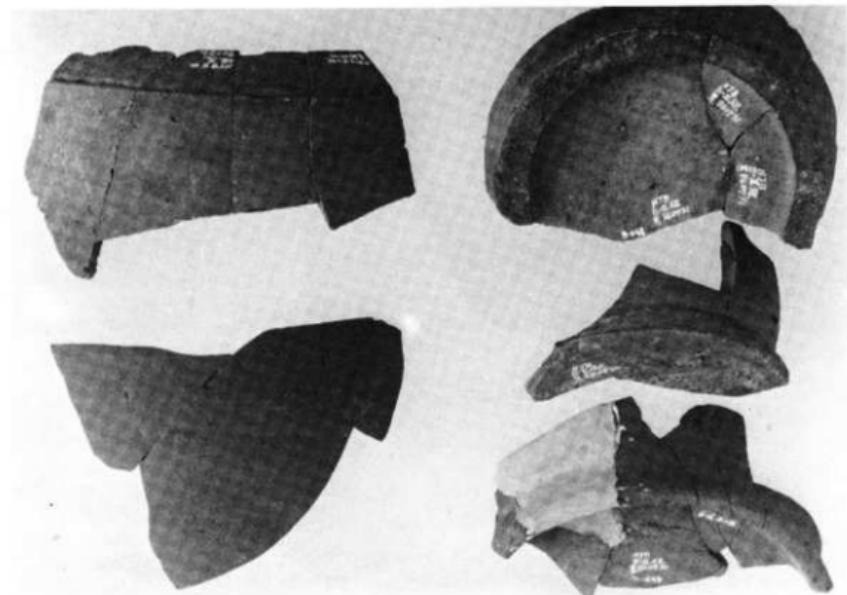
図版3 上:E-IIIトレンチ(西から) 下:河川跡



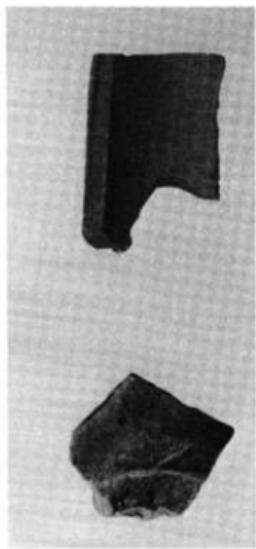
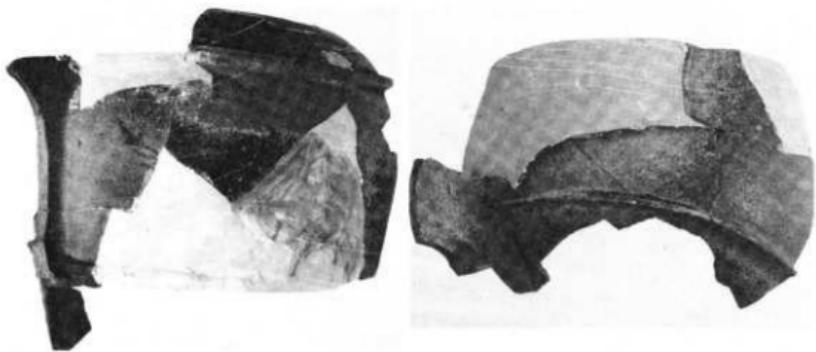
図版4 F-II トレンチ



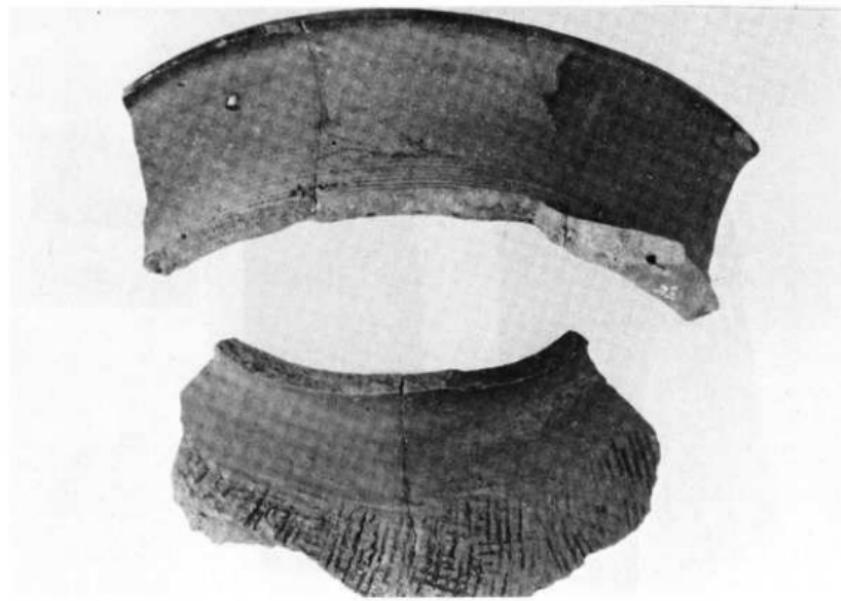
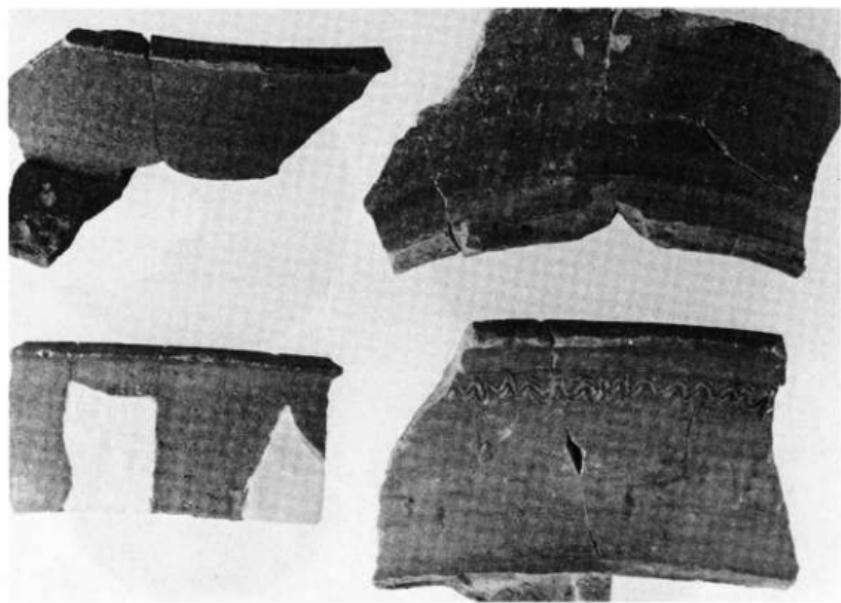
図版5 上：Hトレンチ（西から） 下：土師器・須恵器杯等



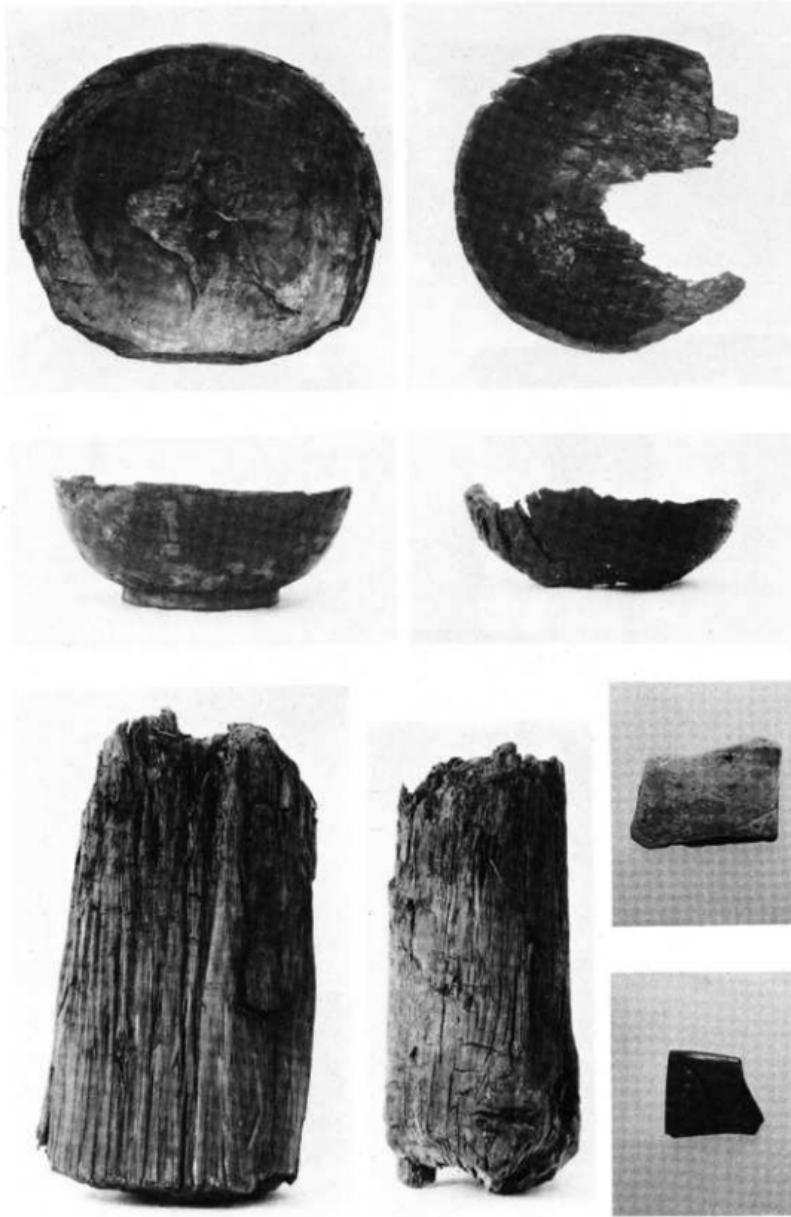
圖版 6 須惠器壺



图版 7 双耳瓶、凤字砚、墨书土器等



図版 8 須恵器甌



图版 9 漆绘碗、柱根、漆袖、青磁

富山県入善町
じょうべのま遺跡
発掘調査概報 (8)

発行日 昭和 60 年 3 月 30 日
編集者 舟崎久雄
発行所 入善町教育委員会
印刷所 田中印刷所
